ある。物の見方や目の付け所といったものを育てて、そういうところに気付かせようとしたんです」と山崎さんは語ります。そうやって物を見る目を養われた子どもたちは、自分たちで詩の題材を選ぶようになりました。

題材を選ぶということは、詩を作るうえで大きな要素です。このことでは、以前からの木細工小ならではの取り組みが、有利に働きました。それこそが「日曜作文」です。詩への取り組みが始まる前から、作文を重視していた木細工小では、1週間の出来事から題材を選んで、作文を書くということを行っていました。今も毎週行われるこの取り組みが、言葉で物事をまとめる力を鍛え、詩や作文を書く力を鍛えました。

加えて、小規模校であるために、米作りの体験や魚のつかみ取りなどに地域の人の積極的な支援を受けることができたこと、自然が豊富で、山菜取りなどの特徴的な体験を行えることなどもプラスに働きました。

そして何より取り組みを支えるのが保護者の理解。PTA総会での「お手伝いを積極的にさせて欲しい」という校長先生の各家庭への呼びかけに、保護者などが積極的に協力。こうして子どもたちに経験という新しい題材は与えられているのです。

地域に根付いて

現在の指導の形は、日曜作文では毎週1回15分ほど、詩ではコンクールの応募に合わせて週1時間ほどの時間を割いています。担当する及川公子教諭は「どうやって思いを引き出すか」を心掛けて子ども

詩について学ぶ児童たち。この日は先生の作った例を自分たちで添削。おかしな表現を見つけては、笑いが起きていた

もたちと対話を重ねます。子どもたちが成長することを第一とした指導は、今も昔も変わりません。

賞を取れば授賞式に招待されて旅行ができるため、子どもたちは名誉であると思う以上に受賞を喜びます。ただ、賞を目的とするのでなく、詩や作文で表現することを楽しいと思ってほしいというのが先生たちの願い。受賞に至らなかった児童をフォローすることも大切にしています。

卒業後も、自主的にコンクールに応募する人もいるなど、詩・作文は確実に児童たちの一部となっています。そんな児童たちの作品は、毎年一つの文集となり、木細工小の学区である米里7区と8区の約70戸に配られています。入学式で受賞を目標に掲げる新入生もいるといいます。

木細工小の紡ぐ言葉は地域をつなぎ、世代をつないでいるのです。

菊池望夢くん（左）、怜史くん（右）と竜太さんの親子

菊池 竜太 さん（31）

平成5年第8回国民文化祭いわて「詩部門」文部大臣奨励賞

賞の授賞式で、県外に3度ほど出かけました。作品の朗読を経験したことで、人前で話すことが気にならなくなりました。こういった経験が、進学したときに役立った人もいたと思います。このような取り組みは、地域の人とのつながりが深いこの地区だからできたのでしょう。

菊池 望夢（のぞむ） くん（10）

平成29年第32回国民文化祭「現代詩の祭典」文部科学大臣賞

前の年の出来事を詩にしたので、思い出すのは大変でした。また会いたいという気持ちや感謝を込めました。

菊池 怜史（れいじ） くん（10）

平成29年第32回国民文化祭「現代詩の祭典」国民文化祭実行委員会会長賞

楽しいので、詩や作文はこれからも続けていきたいです。